

命の遺伝子

プロローグ

高嶋哲夫

男は息を止めた。

右手に持った双眼鏡の視野には、広場全体を埋め尽くした群衆が見える。

もう一方の手にはトランシーバー型の発信機が握られている。セットした新型プラスチック爆薬、セムテックス は十キロ。小さなビルなら完全に破壊できる。

正面に設置された演壇中央にカーキ色の制服を着た男が現われ、マイクを握った。

海鳴りのように聞こえていた群衆のざわめきが引いていく。

男の指先がセイフティカバーをはねのけ、スイッチに触れる。

隣の男が手のひらをズボンにこすりつけて汗を拭き、ライフルを構え直した。スコープ付きガリル・スナイパーライフル。この高性能狙撃銃は祖国から持ち込んだものだ。失敗は絶対に許されない。

「イエット・ファンゲン・ヴィア・アン」

さあ、始まりだ。男はドイツ語で呟く。

一瞬、心臓の鼓動が止まり、すべての音が消えた。

二 X年、七月。

ドイツ西部の都市ドルトン。

郊外にある広場は数千人の若者であふれていた。

「我々は新しい世界を創るために過去の栄光を取り戻し、新しい秩序のもとにこの墮落した世界を崩壊させ、總統の復活を願って。」

スピーカーから流れる男の声が、会場全体を押し包むように響く。

「ハイル、ヒットラー！」

隊列の若者たちがいっせいに右手を斜めに上げ、靴のかかとを鳴らした。七十年前と同じ動作を繰り返す。しかし、この敬礼はいま法律で禁じられている。

広場と森との境を取り巻く千人を超える野次馬からも、同様の叫びにも似た声上がる。

「主催者発表によると、四千二百人。ブラッククロス黨員が、全世界から集まっています。」

三十年代半ばと思われる派手な化粧の女性レポーターが、マイクを握り締めて怒鳴るようにしゃべった。テレビカメラによる撮影は禁止されているが、音声は許可されている。

壇上の両側に並べられた椅子には、老人たちに混じって中年の一組の男女が座っていた。男は遙か昔を懐かしむように、広場の集団を見守っている。

「ハイル、ヒットラー！」

再び声が上がリ、合唱のような叫びと陶酔に包まれた。

四方を囲む森から、わずかに涼を含んだ空気が流れてくる。

轟音が轟いた。舞い上がる煙と粉塵。

一瞬あらゆる音が消え、静寂に包まれた。

演壇の屋根の中央部にぼっかりと穴が開き、崩れ落ちている。

悲鳴があがった。

泣き叫ぶ声が聞こえ、怒号が飛びかう。五千を超す群衆が、各々勝手な方向に走り始めた。

演壇には崩れた屋根の残骸が散らばり、砂塵が降り積もっている。そのなかに千切れた腕や脚が散乱し、内臓のはみ出た胴体が転がっていた。

隠し持っていたテレビカメラの電源が入られ、持ち込み禁止のはずのカメラのシャッター音が響き始めた。

「爆発です。演壇付近に爆発物がしかけられていたもよつです。壇上にはブラッククロス幹部、十人以上が倒れています。議長のフリードリッヒ・ハイパー氏も姿が見えません」

女性レポーターの顔は興奮で引きつり、声は割れている。カメラを担いだ男が、よろめきながら彼女を追う。

「まって！」

レポーターが立ち止まって叫んだ。

「散乱している血の塊は人の手足です！ 千切れた身体の一部です！」

声は絶叫に近くなった。

カメラマンがその肉片をアップに撮る。

「負傷者の数は 数え切れません。辺り一面に人が倒れています。死者の数も おそらく相当数でていると思われまます。なんとという悲劇でしょう。この集会で」

声途切れた。額を押さえて身体を屈めた。手の間から血が流れている。

銃撃の音が響く。森の中から、さらにいくつかの爆発音が聞こえてくる。

「銃撃されている」

カメラマンが呟く。その瞬間カメラが大きく揺れ、カメラマンの後頭部から赤い飛沫が飛んだ。

悲鳴と怒号がさらに増える。

「危険です。ここも危険です」

マイクから流れる声は、大きくひずんでいる。広場全体に血と火薬の臭いが充満していた。遠くで救急車とパトカーのサイレンの音が聞こえている。

北イタリア、リモネ村。

「これは……」

男は思わず低い声を出した。

何度も論文を読み直し、関連文献にも目を通し、十分に理解しているはずだった。しかし今、目の前に見ると思った以上に動揺した。これこそ、自分が探し続けていたものかもしれない。

ディスプレイには、美しいブルーの背景のなかを赤い液体が音を立てるように力強く流れていく。

超音波診断装置に映る血管内部の血液の流れだ。

「全世界に三十八人しか持ち得ない特権です」

背後の白衣の医師が言った。

男の目はディスプレイを凝視したままである。

突然、画面が二つに分かれた。一方は今まで見てきたもので、他方は赤い部分の面積が極端に狭い。

「右が彼女の血管。左が同年代の老人のものです」

男はやっと顔を上げた。

目の前のベッドに横たわり、にこやかな笑顔を向けている七十代の老女に視線を向けた。ディスプレイの映像は彼女の血管だ。普通、この年代の人の血管にはコレステロールが溜まり、血液は細い隙間を流れているのが常なのだ。

「論文は読んでいましたが、実際に見るとまた別の感慨を覚えます」

「男の目はディスプレイに戻っている。」

「実際に本人たちに会い、話し、その現実を目の当たりにすると、全員がそう言います」

「医師はいくぶん誇らしそうに言った。」

「両方ともコレステロールで白濁しています」

二本の試験管を机に置いた。なかには白濁した液が入っている。

医師は手品師のようにもったいぶった動作で、一本の試験管にガラス壺のなかの白い粉末を入れた。

見る間に白濁していた液が透明に変わっていく。二本の差は明確だった。

「ポルタトリーの人たちの血液から精製したタンパク質です」

男は無言だった。

驚き　というより感動で言葉が出てこなかったのだ。

「このコレステロールを分解する奇跡のタンパク質を作る役目を果たすのは、約三十億個ある塩基のたった一文字だけです。その一文字違いの遺伝子が、常人にはない特権をその人間に与えます」

医師は言ってから照れ臭そうに笑った。

自分の目の前にいる男が、遺伝子科学に関しては世界的な科学者であることを思い出したのだ。この研究室の机に並んでいる本の中にも男の書いた専門書が二冊ある。

男は再びベッドの小柄な老女に目を移した。

アルプスの麓、ガルダ湖の畔にある、人口千人足らずの美しい村にこの人々はいた。

「彼らは動脈硬化になりにくい特殊な遺伝子を持つ人たちである。」

「ポルトトーリ」イタリア語で「遺伝子を運ぶ人」と呼ばれる人たちは、世界で三十八人しかいない。彼らの遺伝子「アポA 1」は、血液中でコレステロールを分解するタンパク質を作り出す。

「神のお慈悲です」

医師が感慨を込めて言った。

男の顔に困惑の表情が浮かんだ。

「単なる気紛れにすぎない」

男は呟いて、我に返ったように姿勢を正した。

## 第一章 ベルリン

### 1

トオル・アキツは、ベルリン工科大学大講堂前の石段をゆっくりと降りていた。

立ち止まり、空を見上げた。

初夏のベルリンの空は澄みわたっている。一年間ドイツで暮らしたが、こんなに澄んだ青空は初めてだった。涼しい風が吹き抜けていく。

公園に続く芝生には、何組もの学生たちのグループが出来ていた。

深く息を吸った。濃く透き通った空気が肺に浸透してくる。

『二十一世紀、遺伝子科学と人類』というテーマで、一時間の帰国記念講演を終えた直後だった。

身体の奥には、まだ七百人分の聴衆の熱気が残っている。

階段に腰掛け時刻のひとときをすごしている学生たちの目が、一人の東洋人の姿を追っているのを感じる。

身長百七十六センチ、体重五十八キロ。二十代から三十代半ばになる今まで、この体型はほとんど変わっていない。彫りの深い顔、濃い眉、耳が隠れるほどの黒い髪、そして黒い瞳。ヨーロッパ人にはどこか神秘的な印象を与えるらしく、数日前に旅行したイタリアでも日本から来た宗教家に間違われた。自分でも陽気な人間でないことは自覚している。学生たちが「グリーミー・プロフェッサー」憂鬱な教授と呼んでいるのも知っている。しかし宗教家とは、自分ともっともかけ離れた存在だ。

視線を上げて前方の建物を見た。

教会の尖塔が陽を反射して、鋭い光を投げ掛けてくる。その射るような光に思わず眉根をかめた。同時に鈍い痛みにも似た痺れが精神に広がる。トオルはこぶしを握り締め、全身に沈滞してくる重苦しい気分を振り払った。

十日後にはアメリカに帰らなければならない。しかしドイツを発つ前にも、研究資料の整理、仕事の引き継ぎ……会っておかなければならない人もいる。やることは山ほどあった。

気を取り直して、再び歩き始めようとした足を止めた。

階段を下り切ったところから、緩やかな坂になった芝生が続いている。その三十メートルほど先の道路に、スモーク入り窓ガラスの灰色のセダンが止まっていた。

サングラスをかけた細身の男が、車のドアにもたれて立っている。眼鏡の奥の目は明らかにトオルに向けられていた。見られることには慣れていて、トオルは無視して足を踏み出した。

「プロフェッサー・アキツ！」

階段を下り切ったところで、背後から声がする。

振り返ると、目の前に本が突き出された。ドイツ語のタイトルの分厚い本、『遺伝子の未来』。

今年二月に出した三冊目の本だ。初めて一般向けに書いた遺伝子科学の入門書である。前の二冊は専門書で、五力国語に翻訳され遺伝子科学を学ぶ者にとっては教科書となっている。

「サインしてください」

若い女の声だ。

トオルは相手を見ようとせせず、胸ポケットからペンを出してサインした。

サングラスの男が辺りに目を配りながら足早に近づいてくる。なぜか今まで感じたことのない不安にかられた。

本を女性に押しつけるように返すと、芝生を小走りに歩いた。背後で声が聞こえたが、かまわず歩き続けた。

道路に出たところに、一台のバンが走ってくる。バンは行く手をさえぎるように、トオルの前に回り込んだ。

立ち止まって反対方向を見ると、灰色のセダンが近づいてくる。二台の車はトオルを挟んで止まった。いつのまにか横にサングラスの男が立っている。

バンから男が下りてきて、トオルの腕をつかんだ。

「きみたちは？」

「声を出さないで。危害は加えません」

押し殺したような声で言うと、トオルをバンのほうに連れていく。

階段に目を向けると、女が首を傾げてこちらを見ている。声を上げようとしたときには、身体半分がバンに入っていた。ドアが完全に閉まる前にバンは走り始めた。

ほんの数秒、思考する間もない時間だった。明らかに、こういう仕事に慣れたものたちの行動だ。見ているものにとっては、友人が肩を組んで車に乗り込むように思ったかも知れない。

バンにはスモーク入りの窓ガラスが使われ、外からは見えない。

トオルは二人の男に挟まれるようにして座った。

向かい合わせになった座席には、一人の男が座っている。肩幅の広いがっちりした体格、白髪  
の老人だった。

濃い香りが漂っている。葉巻の匂い。それも、キューバ産の高級葉巻だ。

目をこらして、老人を見ようとしたり。

そのとき、サングラスの男の手がトオルの口元を覆った。老人が男の腕をつかみ、なにか言  
う。

布に染みだした刺激臭が鼻孔にみちる。息を止め、男の手を振り払おうと両腕に力を入れたが、  
さらに強い力で両側から押さえられた。

身体から力が抜け、意識が遠退いていくのを感じていた。

【続きは書籍・文庫にてお楽しみ下さい】

注意

本作品の全部、または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償  
にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等  
の違法行為、もしくは第三者へ譲渡すると著作権法、その他関連法によって処罰されます。